

一流の老舗は、 障害者雇用の責任も果たす

—株式会社奥井海生堂—

職場
ルポ



会社データ

株式会社奥井海生堂

〒914-0063 福井県敦賀市神楽1-4-10
TEL 0770-22-0493 FAX 0770-22-6780
<http://www.konbu.co.jp/>

- 創業：1871(明治4)年(会社設立：1995(平成7)年4月)
- 資本金：4000万円
- 代表者：代表取締役 奥井 隆
- 業種：昆布製造卸業・小売業
- 社員：48人

(文)清原れい子(写真)小山博孝

Keyword：製造業、小売業、精神障害、知的障害、身体障害、聴覚障害、作業所、ジョブコーチ、トライアル雇用、生活・就業支援センター

POINT

- ① 早くから作業所に業務を委託
- ② 驚き、慣れ、自然に
- ③ 日本の食文化の復興とともに

縁あって精神障害者を雇用

敦賀は、江戸の昔から北前船の中継地として栄え、北海道の産物が琵琶湖を経て京都や関西に運ばれていた。なかでも昆布は重要な地位を占め、昆布加工は敦賀の地場産業だった。熟練の昆布職人が削り込む「手すきおぼろ昆布」は、いまでも全国一のシェアを誇る。

昆布加工の老舗「株式会社奥井海生堂」は、廃藩置県で武士の地位を追われた奥井半吾さんが1871（明治4）年に創業し、昆布商としての基礎を固めた。2代目のとき大本山永平寺御用達となり、100年余を経た今日まで昆布を納め続けている。

和風モダンのしゃれた社屋の本社工場で、専務取締役の奥井光子さんにお話をうかがった。

「140年、いいときも悪いときもありました。初代、2代目は順調だったのですが、主人（社長の隆さん）の父の時代は化学調味料に押されて昆布が売れないときもありました」

その後、大分県で「一村一品運動」が起こり、世のなかの時流が変わって急に仕事量が増えたことが、障害者雇用のきっかけになった。現在は社会福祉法人「二州青松の郷・障害福祉サービスセンター」となっている



奥井光子専務取締役

るが、当時は無認可だった精神障害者の作業所「ひまわりの家」が近くにあった。敦賀市保健所から「何か作業があったら回してください」という依頼を受けて、専務の光子さんが出かけてみると、何もすることがなく、ただ座っている人たちがいた。

「みんな暗いのです。ちょうど東京出荷で量が増えるときでしたので、結び昆布や松葉昆布の作業をしてもらいました。最初は無口でしたが、施設に必要な湯沸かし器を寄付したり、物を持っていったりするうちに、慕ってくれるようになりました」

そのうち、「奥井さんのところで働かせてほしい」と頼まれた。1986（昭和61）年のことだった。

「仕事が一番よくできる、手先が器用な子を1人採用しようと思ったのですが、3人が働きたいとききました。その後、うちの子どもも働かせてほしいと障

害者の親ごさんから頼まれて預かりましたが、出たり入ったりでした。結婚して、赤ちゃんが生まれた人もいます。当時は若かったので、『おばちゃん』と呼ばれるのはちょっと抵抗があったのですが、慕ってくれて、かわいかった。その思いがなかったら、雇用はできなかったですね」

最初の3人は、親の介護で最近1人が退職し、いまでも働き続けているのは「本命ではなかった」といわれる品川静代さん。勤続29年を迎えている。

「少ない人数のときはよかったのですが、社員の数が増えてくると、なかにはいじめたりする人がいます。会社が大きくなって、私が生産現場から離れて目が届かなくなりましたが、何かあれば、内情をわかっている主任から情報が入ります。そんなとき私は怒りますよ」

現在も、ひまわりの家には昆布作りの作業を出している。

1カ月で抵抗はなくなる

10年ほど前、障害者雇用に熱心な地元ハローワークの担当者からトライアル雇用を勧められたのが、第二のスタートになった。専務の光子さんはそれまでの経験から、障害者といえば精神障害者をイメージしていた。

「家族の一員のように一緒に働いてい



奥井海生堂。店内には高級昆布が並ぶ

ましたから、障害者を雇用しているという意識はありませんでした。1人ぐらいなら雇用してもいいかなと思っていたら、それまで私が見たこともない人たちが3人きました。ダウン症の子とか、雰囲気が違う。断つてくれと社員からいわれました」

そのとき、福井障害者職業センターの森本恭枝さんがジョブコーチとしてかかわった。「それまで施設にいて、社会的ルールが身につけていない人たちがいたので、受入れ側のショックは大きかったですよね。ただ、陰日な



福井障害者職業センター
森本恭枝ジョブコーチ

たなく働く人たちでした」と振り返る。

社会福祉法人敦賀市社会福祉事業団「嶺南障害者就業・生活支援センターひびき」センター長補佐の平吹威一郎さんは、地元の就労支援機関としてかかわり続けてきた。当時のことを「いまでこそ、施設からの就労移行型の就職はメジャーになりましたが、10年前は施設を利用して働きたい人はメジャーではありませんでした」と話す。

初対面は驚きから始まったが、毎日顔を合わせていくうちに専務の光子さんも社員も抵抗がなくなっていた。

「ひと月ほどしたら、雰囲気に慣れてきました。本人たちも慣れてきます。純粹で、しゃべっていると心が和らぐ。トライアル雇用後に雇用しないという雰囲気にはなりません。ただ社長は、『老舗の店なので、お客様から苦情が出るのでは…』と反対でした」

トリアル雇用の終了後、3人とも採

用した。その後、1人は退職。ダウン症の女性は約8年間働いた後、パティシエになりたいと辞めていった。そして、現在も働く山中正樹さんは、会社になくはならぬ存在になっている。

「当時は、障害者を受け入れにくそうな老舗の店で雇用すると、ほかにも広がると思われたのでしょうか。うちで働いている人はハート『心』がいい。そうでなければ仕事は一緒にできません。そういう意味では、私は恵まれていたのかもしれない」

社員はパートも含めて48人。身体障害



嶺南障害者就業・生活支援センターひびき、平吹威一郎センター長補佐（中）

者1人と、時給制で精神障害者2人、聴覚障害者1人、知的障害者1人が働いている。

「神の手」の障害者

作業場に入ると、昆布のいい香りがする。「品ちゃん」は、最初は一番ダメそうに見えた」と専務の光子さん。「専務は冷静に判断してくれて、母親的存在です。何でも相談できます」と品川静代さん。



入社して29年になる品川静代さん。日高細切り昆布の袋詰め作業を担当している

「熱で包装するヒートシーラーの仕事は簡単そうに見えて、空気を入れるのが難しいのです。品川さんは、きつい薬で症状が治まっています。薬を変えたときに様子がおかしくなり、『品ちゃん、薬が変わっていない?』といって、元に戻したこともありまして。12月の繁忙期に少しでも役に立ちたいという気持ちから薬を止めると、しんどくないので仕事もものすごく早い。でも、すぐわかるので、薬は絶対に止められないといけないと思います」

山中正樹さんは、力仕事も繊細な仕事も、高い。

2人の会話から、強い信頼関係で結ばれているのがわかる。人との出会いによって、人生は左右されることがある。品川さんにとって、専務との出会いはとても大きかったはずだ。29年の間にはいろいろな出来事があったそうだが、自宅を建てて両親の面倒をみている。手際よく作業を進めている品川さんを見守りながら、専務の光子さんが話を続けた。



「大白おぼろ昆布」の袋詰め作業をする聴覚障害の久保博史さん（36歳）

何でもできる。

「山中君は、手先が器用です。調理補助をしていたので、昆布を切るのが上手で感心しています。力があるので、ほかの人は続きません。仕事が進められると不安になるのですが、次々に仕事があると安心していきます」

聴覚障害がある久保博史さんもヒートシーラーで包装していた。久保さんが入社したとき、周囲の人たちは手話の練習をした。

「久保君は賢い。身ぶり手ぶりや口の動きで、仕事は何をしたらいいか、この人は何を考えているのかわかります。いたいことはメールや紙に書いてくる。地元の聴覚障害者協会の役員をしています」



中村房江主任の指導で「菊花毬布」をつくる
山中正樹さん（41歳）

「2人の作業は、早さ、一生懸命さといい、宝物です。奥井海生堂が自分のすべてだと思って仕事にきてくれてます。ほかの社員に『あの子らがおらんかったら、仕事はできない』と常々いっています。忙しい11月、12月は、2人がいない土日に作業が停滞します。ほかの社員から『2人を土曜日に出勤させてください』といわれると、『自分たちでお願い下さい』といいます」

「主任がいるので安心」と専務から信頼されている主任の中村房江さんは、生産現場の「お母さん役」だ。

「久保さんに気をつけていることは、私の口元を見て理解してくれるので、マスクなどを外して話すことです。聞こえないのですが、頭がすごくいい。山中さんには、同じことを繰り返していかなければなりません

が、その代わり、オールマイティで何でもできます。『神の手』と思えるほど手先が器用で、いないと困ります。優しい子で、心が癒されますね」

永平寺に100年納めている菊花毬布の作り方を、主任と山中さんが見せてくれた。天日で干して油で揚げると、花が開いたようになるという。

「障害者にとつて、居心地はいいと思いますよ。私たちのような小さな会社は、権限のある私の一声で、思いが通りません。私は弱い人を大事にしたい。若い男性社員にはきついですが、『この人たちに負けたらあかん』とはっきりいいますから、ときには自分たちのほうが仕事は



毬布切り作業をする山中さん

できないと感じるのではないですか。私も働いている障害者も自然なのが、一緒にいられるコッでしょうね。信頼関係です」と専務が話す。

山中さんは仕事帰りに毎日「ひびき」に寄っていく。

「山中君は、そこで悩みをしゃべったりし

て、心を癒してもらっています。仕事のアフターケアにとてもいい場所みたいです。山中君は車も持っていますよ」

ひびきは、奥井海生堂の創業地である神楽本店の斜め前、商店街の空き店舗を利用して活動を行っている。

温かいつながりで定着

専務の光子さんの話のしほしから、障害のある人たちへの愛情が伝わってくる。

「私は、いまいる人たちが大事に定年まで雇用して、一生を見守りたいです」

平吹さんは、「専務さんは仕事も人生の一部と思われて、一人ひとりの人生に寄り添いながら、その人が必要とするときには会社としてできる精いっぱいのことをされています。品川さんのような昔

からの家庭的な雇用形態とともに、この10年近くは障害者職業センターのジョブコーチ、障害者就業・生活支援センターなど新しくできた就労支援機関と協力しながら、変化に対応して下さっています」

森本さんは、「専務さんは先駆者という感じですね。問題のある方の場合は、最初にご家族にも連絡して話し合いを持つようにして下さいました。また不安定になつた方には、体調がよくなるまで休んでいいと認めて下さっています。聴覚障害者を雇用されたときは、最初に手話を練習されたので、まわりの人が話しかけるタイミングができたと思います」

最初のころ障害者雇用に反対していた社長の隆さんが、賛成に回ったエピソードを専務が話してくれた。

「主人がある日変わったのは、外資系の超高級ホテルのスタッフたちの会社見学をお引き受けしたことがきっかけでした。一行のなかに車いすの人とダウン症の人がごく自然にいたので驚くと、『一緒に働いています。本部の指示があるし、社風として当たり前前に仲間として対応しています』。それが米国の一流企業のスタンダードなのだとなりました。またテレビ取材で、『ダウン症の人が働いているのはすばらしい』と褒めたたえら

れたこともありました。主人は『自分の考え方が遅れていた』と、それからは私よりも大事に考えてくれるようになりました」

障害者雇用は企業責任

商品開発、パッケージデザインは、結婚前は臨床検査技師をしていたという専務の光子さんが担当している。越前和紙を使ったギフト用の化粧箱は好評だ。社長の隆さんとの共通の趣味はマラソンで、東京マラソンも数回走っている。

昆布に関する本も出版している社長は、昆布を世界に発信したいと、パリで開催された「日本の食文化セミナー」で講演し、昆布と日本酒のコラボレーションのイベントを行い、大手デパートに出店もしている。社長に経営哲学をうかがった。

「創業143年目ですが、会社は社会

性がないと生きながらえないと思いません。社会性とは、納税と雇用です。その雇用は障害者雇用をベースにすえないと、社会から退場させられるという認識でいます。そのことは社員に徹底して教えています。障害者を雇うことで、社員が優しくなりますね」

日本食は今秋、世界無形文化遺産に登録される見通しだとか。社長の隆さんは、昆布のすばらしさをさらに広めていきたいと話す。

「私たち日本人は海のもと、低エネルギーで成長する農産物をうまく食べてきた民族です。そういう食生活が地球の食糧事情を救っていくというなかで、和食が世界に出ていくチャンスは非常にあります。また、カロリーが低くて四季をめでる、すばらしい日本食文化に欧米人が目を向けています。ダシを使った料理は日本料理だけ。なかでも植物性のダシは、昆布だけです。地球環境と味覚と健康を考えたとき、昆布は世界に向けた発信力があるのです。『消え行く業界』といわれた父のころには考えられなかったことですが、世のながが振り向いている。オーソドックスに、世界に発信できる企業になりたいですね」

和食ブームで、「本物」志向の今日、一流の昆布を作る老舗企業の一翼を、障害者の人たちが担っているのがうれしかった。



奥井隆代表取締役